

【晉紀三十一】 強圉作噩，一年

■東晋 ●北魏 ▲後燕 続国訳漢文大成 経子史部 第 7 卷 9p

安皇帝甲隆安元年（丁酉，397年）（安帝の諱は徳宗、字は徳字、孝武帝の長子）

■春，正月，己亥（1日）朔，帝は元服を加え，改元す。左僕射の王珣を以て尚書令と為す。領軍將軍の王國寶を左僕射と為し，選を領ぜしめ，仍って後將軍、丹楊尹を加える。會稽王の道子は悉く東宮の兵を以て國寶に配し，之を領せ使む。

▲〔燕の范陽王の徳は魏軍を破る〕燕の范陽王の徳は救いを秦に求め，秦兵は出です。鄴（河北省邯鄲市臨漳県、現・河南省安陽市安陽県）中は恟懼す。（7-010p）賀頼盧は自ら魏王の珪之舅なるを以て，東平公の（拓跋）儀（慕容垂の衰弱を報告したのは 107 卷太元 13 年にあり）の節度を受けず，是れに由り儀と隙有り。儀の司馬の丁建は陰かに徳と通じ，従いて而して之を構間し，書を射て城中に入れ其の状を言う。甲辰（6日），風霾（つちふら 砂塵舞い四辺朦朧とする）し，晝晦し。頼盧の營に火有り，儀に建言して曰く、

「頼盧は營を燒きて變と為さん矣。」

儀は以て然りと為し，兵を引いて退く。頼盧は之を聞き，亦た退く。建は其の衆を帥いて徳に詣りて降り，且つ言う、

「儀の師は老れたり、撃つべし。」

徳は桂陽王の鎮、南安王の青を遣わして騎七千を帥いて魏軍を追撃し，大いに之を破る。

▲燕主の寶は左衛將軍の慕輿騰をして博陵（直隸省保定道蠡県、現・河北省保定市蠡県）を攻め使め，魏の置く所の守宰を殺す。

▲〔信都陥落〕王建等は信都を攻め，六十餘日にして下らず，士卒は多く死す。庚申（22日），魏王の珪は自ら信都を攻め。壬戌（24日）夜，燕の宜都王の鳳は（恐れて）城を逾えて中山に奔る。癸亥（25日），信都は魏に降る。

北涼 〔呂光は西秦王の乾歸を攻めて破れず〕涼王の光は西秦王の乾歸の數々反覆（乾歸は既に称藩を悔いていた）するを以て，兵を擧げて之を伐つ。乾歸の群下は東に成紀（甘肅省渭川道秦安県、現・天水市秦安県）に奔りて以て之を避けるを請い，乾歸は曰く、

「軍之勝敗は，巧拙に在り，衆寡に在らず。光の兵は衆しと雖も而して法無く，其の弟の延は勇にして而して謀なし，憚るに足らざる也。且つ其の精兵は盡く延の所に在り，延が敗れば，光は自ら走らん矣。」光は長最に軍し，太原公の纂等を遣わして歩騎三萬を帥いて金城を攻める。乾歸は衆二萬を帥いて之を救い，未だ到らず，纂等は金城を抜く。光は又た其の將の梁恭等を遣わして甲卒萬餘を以て陽武の下峽（甘肅省西寧道の黄河流域上流、現・青海省西寧市など）に出て，秦州刺史の沒弈干と其の東を攻め，天水公の延は枹罕（臨夏回族自治区蘭山道導河県、現・臨夏市城郊鎮）之衆を以て臨洮（現・甘肅省定西市臨洮県）、武始、河關を攻め，皆な之に克つ。乾歸は人をして延を給か使めて云う、

「乾歸の衆は潰れ，成紀に奔る。」

延は引いて輕騎を以て之を追わんと欲し，司馬の耿稚は諫めて曰く、

「乾歸は勇略は人に過ぎる，安んぞ肯て風を望みて自ら潰れんや？前に王廣、楊定（前卷孝武帝 19 年にあり）

を破るや、皆な羸^{るい}(弱い)師以て之を誘えり。今告げる者は視るに高く色動き、殆んど必ず奸有り、宜しく陳を整えて而して前^{すす}み、歩騎をして相い屬^{つづ}か使め、諸軍の畢^{ことごと}く集まるを俟ち、然る後に之を撃てば、克たざる無き矣。」

延は従わず、進みて、乾歸と遇い、延は戦死す。稚と將軍の姜顯は散卒を収め、還りて枹罕に屯す。光は亦た兵を引いて姑臧に還る。

南涼【南涼は建国す】秃髮烏孤は自ら大都督、大將軍、大單于、西平王と稱し、大赦し、改元して太初とす。兵を廣武に治め、涼の金城を攻めて、之に克つ。涼王の光は將軍の竇苟を遣わして之を伐ち、街亭(甘肅省甘涼道平蕃県、現・蘭州市永登県、街亭の戦いとは場所が違うか)に戦い、涼兵は大敗す。

【後燕と北魏の中山攻防戦】

▲燕主の竇は魏王の珪が信都を攻めるを聞き、出でて深澤(直隸省保定道深澤県、現・石家荘市深沢県)に屯し、趙王の麟を遣わして楊城(直隸省保定道上祁県、現・保定市安国市)を攻めしめ(7-011p)、守兵三百を殺す。竇は悉く珍寶及び宮人を出し郡縣の群盜を募りて以て魏を撃つ。

●【竇は一旦珪を追い詰めるも、攻防戦続く】二月、己巳(1日)朔、珪は還りて楊城に屯す。沒根の兄の子の丑提(続は醜提)は并州の監軍^た為り、其の叔父が燕に降るを聞き、誅を懼れ、部する所の兵を帥いて國に還りて亂を作る。珪は北に還らんと欲し、其の國の相の涉延を遣わして燕に和を求める、且つ其の弟を以て質と為すを請う。竇は魏に内難有るを聞き、許さず、冗從僕射の蘭真をして珪が恩に負けるを責め使め、悉く其の衆歩卒十二萬、騎三萬七千を發して曲陽之柏肆(直隸省保定道藁城県、現・石家荘市藁城区)に屯し、滹沱水の北に營し以て之を邀^{むか}える。丁丑(9日)、魏軍は至り、水の南に營す。竇は師を潜めて夜濟り、勇敢萬餘人を募りて魏營を襲い、竇は營の北に陳し以て之が援と為す。兵を募り風に因りて火を縱つ。急に魏軍を撃ち、魏軍は大いに亂れ、珪は驚き起ち、營を棄てて跣^{はだし}にて走る。燕の將軍の乞特真は百餘人を帥いて其の帳下に至りて、珪の衣靴(続は鞬)を得る。既に而して募りた兵は故無くして自ら驚き、互に相い斫射す。珪は營外に於いて之を望見し、乃ち鼓を撃ちて衆を収め、左右及び中軍の將士の舟(続は無し)は稍稍來たり集まり、多く火炬を營外に布き、騎を縱ちて之を冲(続は衝)く。募兵は大敗し、還りて竇の陳に赴き、竇は兵を引いて復た水を北に渡る。戊寅(10日)、魏は衆を整えて而して至り、燕と相い持ち、燕軍は氣を奪われる。竇は引いて中山に還り、魏兵は隨つて而して之を撃ち、燕兵は屢々敗る。竇は懼れ、大軍を棄て、騎二萬を帥いて奔りて還る。時に大いに風雪となり、凍死者は相い枕す。竇は魏軍の及ぶ所と為るを恐れ、士卒に命じて皆な袍仗、兵器數十萬を棄てしめ、寸刃も返さず、燕之朝臣將卒は魏に降り及び魏の繫虜する所と為る者は甚だ衆なり。是より先、張袞は常(続は嘗)に魏王の珪の為に燕の秘書監の崔逞之材を言い、珪は之を得、甚だ喜び、逞を以て尚書と為し、三十六曹(後漢光武帝は尚書を六曹として、34部と左右丞を置き合わせて36人)を録せ使め、任じて政事を以てす。

●【魏軍崩壊の虚報届く】魏の軍士に柏肆より亡^にげ歸る者有り、言わく、「大軍は敗れ散り、王の處を知らず。道は晉陽を過ぎ、晉陽の守將の封真是因りて兵を起こして并州刺史の曲陽の侯素延を攻めて、素延は撃ちて之を斬る。」

●【魏は三部の反乱を鎮圧】南安公の順は雲中を守り、之を聞き、自ら國事を攝せんとす。幢將の代人の莫題は曰く、

「此く大事は、輕爾(輕率)す可からず、宜しく審らかにして後問(後の報告通知)を待つべし。然らずんば、禍を為すこと細ならず。」

順は乃ち止む。順は、什翼犍之孫也。賀蘭の部帥の附力眷、紇鄰の部帥の匿物尼、紇奚の部帥の叱奴根は皆な兵を擧げて反し、順は之を討ち、克たず。珪は安遠將軍の庾岳を遣わして萬騎を帥いて還りて三部を討たしめて、皆な之を平げ、國人は乃ち安ず。珪は新附を撫慰せんと欲し、深く參合之誅（參合陂での誅殺の経験から燕軍がなかなか降らない、前卷孝武帝太元 20 年にあり）を悔い、素延は反者を討ち殺戮多きに過ぎるに坐して、官を免ず。奚牧を以て并州刺史と為す。牧は東秦主（乞伏氏が西秦を建てたので東秦と區別、後秦）の興に書を與えて稱す、「頓首」と。之と禮を均しくす。興は怒り、以て珪に告げ、(7-012p) 珪は之れが為に牧を殺す。▲[慕容宝暗殺計画失敗] 己卯（11 日）夜、燕の尚書郎の慕容皓は燕主の寶を弑して、趙王の麟を立てんと謀る。克たず、關を斬りて出でて魏に奔る。麟は是に由りて自ら安ぜず。▲三月、燕は儀同三司の武郷（石勒は上黨を分けて武郷郡武郷県を置く）の張崇を以て司空と為す。

【慕容会の救援遅れ、中山籠城長引き、内難起こる】

▲[清河王の會は救援躊躇するも、建威將軍の餘崇は奮闘す] 初め、燕の清河王の會は魏軍の東に下るを聞き、表して難に赴むかと求め、燕主の寶は之を許す。會は初め（龍城を）去るの意無し、征南將軍の庫辱官偉、建威將軍の餘崇（前卷孝武帝太元 21 年にあり）をして兵五千を將いて前鋒と為さしめる。崇は、嵩之子也。偉等は盧龍（直隸省津海道盧龍県、現・秦皇島市盧竜県）に頓すること百日に近く、食無く、馬牛を啖いて且つ盡きんとするに、會は發せず。寶は怒り、累々詔して切に責める。會は已むを得ず、治行簡練（出發準備と簡閱訓練）を以て名と為し、復た留まること月餘り。時に道路は通じず、偉は輕軍して前行して道を通じ使め、魏の強弱を偵（察）し、且つ聲勢を張らんと欲す。諸將は皆な畏れ避けて行くを欲せず。餘崇は奮いて曰く、

「今巨寇は滔天し、京都（中山）は危きに逼る、匹夫は猶ほ命を致し以て君父を救わんと思う、諸君は國の寵任を荷ない、而して更に生を惜しむ乎！若し社稷が傾覆すれば、臣の節は立たず、死して餘の辱しめ有り。諸君は安んじて此に居れ、崇はこれに當たらんを請う。」

偉は喜び、歩騎五百人を簡ひ給す。崇は進みて漁陽に至り、魏の千餘騎に遇い、崇は其の衆に謂って曰く、「彼は衆にして我は寡なし、撃たずして則ち免かるを得ず。」

乃ち鼓噪して直進し、崇は手ずから十餘人を殺す。魏の騎は潰え去り、崇は亦た引いて還り、首を斬り生を獲り、具に敵中の闊狹を言い、衆心は稍々振う。會は乃ち道に上りて徐々に進み、是の月、始めて薊城に達す。

●[包圍下の中山からの出撃を巡り意見対立] 魏は中山を圍むこと既に久しく、城中の將士は皆な出戦を思う。征北大將軍の隆は寶に言つて曰く、

「涉珪は屢々小利を獲ると雖も、然るに兵を頓して年を経て（去年 11 月包圍より年を越える）、凶勢（凶惡なる敵の勢力）は沮屈し、士馬は太半は死傷し、人心は歸るを思い、諸部（賀蘭・紇鄰・紇奚の三部の謀反のこと）は離散し、正に是れは之を破るの時なる可き也。之に加えるに城を擧げて奮わんと思ひ、若し我之銳きに因りて、彼之衰えるに乗れば、往きて克たざるは無し。如し其の持重して決せざれば、將卒は氣喪い、日に益々困は逼り、事久しければ變が生じ、後は之を用いんと欲すると雖も、得る可からざる也！」

寶は之を然りとする。而して衛大將軍の麟（異志あり）は毎に其の議を沮み、隆は列を成して而して罷む者、前後に數四なり。

▲[常山以西の割讓ならず、出撃せず] 寶は人を使わして魏王の珪に請わしめ、其の弟の觚（燕に留まるは 107 卷孝武帝 16 年にあり）を還し、常山以西（并州）を割きて皆な魏に與え以て和を求めんと欲す。珪は之を許

す。既に而して**竇**は之を悔いる。己酉（11日），**珪**は盧奴（直隸省保定道定県治、現・定州市）に如き，辛亥（13日），復た中山を圍む。燕の將士數千人は俱に自ら**竇**に請いて曰く、

「今坐して窮城を守り，終に困弊す，臣等は願はくは一たび出でて樂戰（座して待つより快く戦う）するを得るべし，**(7-013p)**而して**陛下**は毎に之を抑え，此くは坐して自ら敗を摧すと為る也。且つ圍みを受けて時を歴て，他は奇變無く，徒らに久しきを積みて寇賊の自ら退かんことを望む。今内外之勢いは，強弱は懸絶し，彼は必ず自ら退かざるは明らか矣，宜しく衆に従いて一決せん。」

竇は之を許す。**隆**は退きて而して兵を勅し，諸參佐を召いて之に謂って曰く、

「皇威は振るわず，寇賊は内に侮り，臣子は恥じを同じくし，義は生を顧みず。今幸い而して破賊を破り，吉にして還れば固より善し。若し其の不幸なるも，亦は吾の志節をして展ぶるを獲ら使めん。卿等は北に吾が母を見る者有れば（**隆**は初め龍城に鎮し母と俱に北す。慕容垂が召し魏を伐つに及び、母は龍城に残る），吾が為に此の情を道（続は言う）とすべし也！」

乃ち甲を被り馬に上り，門に詣りて命を俟つ。**麟**は復た固く**竇**を止め，衆は大いに忿恨し，**隆**は涕泣して而して還る。

▲〔中山の團結崩壊、慕容隆の提案で龍城へ撤退決断〕是の夜，**麟**は兵を以て左衛將軍の北地の王**精**を劫おびやかし，禁兵（近衛兵）を帥いて**竇**を弑いさ使む。**精**は義を以て之を拒み，**麟**は怒り，**精**を殺し，出でて西山（中山の西、曲陽の西山）に奔り，丁零の餘衆（翟眞の殘党）に依る。是に於いて城中の人情は震駭す。**竇**は**麟**の之く所を知らず，清河王の**會**の軍が近きに在るを以て，**麟**が**會**の軍を奪うを恐れ，先ず龍城に據り，乃ち**隆**及び驃騎大將軍の**農**を召き，中山を去り，走りて龍城を保つを謀る。**隆**は曰く、

「先帝は風に櫛くけず雨に沐もし以て中興之業を成し，崩じて未だ期年（一年）ならずして而して天下は大いに壞れ，豈に之を孤負（先帝に背く）と謂わざるを得ん邪！今外寇は方に盛んにして而して内難は復た起こり，骨肉は乖へ（続、乖×）離し，百姓は疑い懼れ，誠に以て敵を拒む可からず。北に舊都に遷るも，亦た事之宜しきに然（続による）るべし。⇨然らば龍川（龍城・和龍）は地狹く民貧しく，若し中國之意を以て足ること其の中に取り，復た朝夕大功有るを望めば，此れ必ず不可なり。若し用を節し民を愛し，農を務め兵を訓おしえれば，數年之中には，公私は充實し，而して趙、魏之間は，寇暴を厭苦し，民は燕の德を思い，庶幾こいねがわくは旆はたを返し，故業を克復せん。如し其の未だ能わざれば，則ち險に憑よりて自ら固め，猶ほ以て優遊して銳を養うに足る耳。」

竇は曰く、

「卿の言は理を盡くすなり，朕は一に卿の意に従わん耳。」

▲〔慕容隆の幕僚は多く留まるを求める〕遼東の高撫は，卜筮ぼくぜいを善くし，素より**隆**の信厚き所と為り，私に**隆**に謂って曰く、

「殿下は北に行けば，終に達する能わず，太妃も亦た見るを得ざる可し。若し主上をして獨り往か使め，殿下は潜かに此に留まれば，必ず大功有り。」

隆は曰く、

「國に大いに難有り，主上は蒙塵し，且つ老母は北に在り，吾は北首して而して死ぬを得れば，猶ほ恨む所無し。卿は是れ何を言う也！」

乃ち遍く僚佐を召き，其の去留を問ひ，唯だ司馬の**魯恭**、參軍の**成岌**は従うを願ひ，餘は皆な留まらんと欲し，**隆**は並びて之を聽ゆるす。

▲〔慕容農の陣営内の谷會歸は自立を促す〕**農**の部將の**谷會歸**は**農**に説きて曰く、

「城中之人は、皆な**涉珪**が、參合で殺す所の者の父兄子弟にして、泣血は踴躍し、魏と戦わんと欲し、而も衛軍（衛大將軍の慕容麟）の抑える所と為る。今**主上**は當に北に遷らんとすと聞く、皆な曰く、（7-014p）『慕容氏の一人を得て奉り而して之を立て、以て魏と戦えば、死しても恨む所無し。』**大王**は幸にも而して此に留まり、以て衆望に副い、魏軍を撃退し、畿甸を撫寧し、大駕を奉迎すれば、亦た忠臣為るを失わざる也。」

農は**歸**を殺さんと欲し而も其の材力を惜しみ、之に謂って曰く、
「必ず此くの如く以て生きるを望めば、死に就くに如かず！」

【中山崩壊と大混乱】

▲ 【中山から燕軍逃亡】 壬子（14日）、夜、**寶**と太子の**策**、遼西王の**農**、高陽王の**隆**、長樂王の**盛**等萬餘騎は出でて**會**の軍に赴き、河間王の**熙**、勃海王の**朗**、博陵王の**鑒**は皆な幼く、城を出る能わず、**隆**は還りて入り之を迎え、自ら鞍（馬のむながい）乗を為り、俱に免るを得る。燕將の**王沈**等は魏に降る。**樂浪王**の**惠**、中書侍郎の**韓范**、員外郎の**段宏**、太史令の**劉起**等は工伎三百を帥いて鄴（河北省邯鄲市臨漳県、現・河南省安陽市安陽県）に奔る。

▲ 【參合陂の抗を恐れて籠城】 中山の城中は主無く、百姓は惶惑し、東門は閉じず。魏王は**珪**は夜入城せんと欲し、冠軍將軍の**王建**は志は虜掠に在り、乃ち言う、
「恐らくは士卒が府庫の物を盗まん、請う明旦を俟つべし」

珪は乃ち止む。燕の開封公の**詳**は**寶**に従うに及ばず、城中に立ちて以て主と為り、閉門して拒み守る。**珪**は衆を盡くして之を攻め、連日抜かず、人を使わして巢車（木の巢の様に櫓を作る車）に登り、城に臨みて之を諭しめて曰く、

「**慕容寶**は已に汝を棄てて走り、汝曹百姓は空しく自ら死を取らん、誰の為にか欲せん乎？」
皆な曰く、

「群小は無知にして、復た參合之衆の如く（抗される事）ならんを恐れ、故に苟くも旬月之命を延べる耳。」
珪は**王建**（抗する事を提案）を顧みて其の面に唾し、中領將軍の**長孫肥**、左將軍の**李栗**をして三千騎を將して**寶**を追わ使めて范陽に至り、及ばず、其の新城（郡名、直隸省保定道安肅県、現・保定市徐水区）の戍を破りて而して還る。

■ 甲寅（16日）、皇太后の**李氏**を尊して太皇太后と為す。戊午（20日）、皇后**王氏**を立てる。

▲ 【慕容麟の逃亡】 燕主の**寶**は中山を出、趙王の**麟**と**併開**（（続に卩に开だが併、直隸省保定道完県?、現・保定市順平県））城に遇い、**麟**は不意に**寶**が至り、驚駭し、其の衆を帥いて蒲陰（直隸省保定道完県の東南、現・保定市順平県蒲陽鎮）に奔り、復た出でて望都に屯し、土人は頗る之に供給す。**慕容詳**は兵を遣わして**麟**を掩撃せしめ、其の妻子を獲り、**麟**は脱走して山に入る。

▲ 【清河王の會の兵を農、隆に分ける】 甲寅（16日）、**寶**は薊（現・北京市）に至り、殿中の親近は散亡して略ぼ盡き、惟だ高陽王の**隆**の領する所の數百騎は宿衛と為る。清河王の**會**は騎卒二萬を帥いて薊南に迎え、**寶**は**會**の容止に怏怏として恨色（跡継となるを得ざるうらみ、前卷孝武帝太元21年にあり）有るを怪しみて、密かに**隆**及び遼西王の**農**に告げる。**農**、**隆**は俱に曰く、

「**會**は年少く、専ら方面に任じられ、習驕（驕矜の習慣）の致る所、豈に它有らん也！臣等は當に禮を以て之を責めるべし。」

寶は之に従うと雖も、然るに猶ほ詔して**會**の兵を解きて以て**隆**に屬さしめんとするも、**隆**は固辭す。乃ち

會の兵を減じて分けて**農、隆**に給す。又た西可公の**庫辱官驥**を遣わして兵三千を帥いて中山を助け守らしむ。

▲ 「慕容會は率先して追う魏軍を撃破、慕容隆は慷慨流涕す」 丙辰（18日）、**寶**は盡く薊中の府庫を徙して北に龍城に趣く。魏の**石河頭**（漁陽に屯す）は兵を引いて之を追ひ、戊午（20日）、**寶**に夏謙澤（京兆順義県、現・北京市順義区）にて及ぶ。（7-015p）**寶**は戦うを欲せず、清河王の**會**は曰く、

「臣は士卒を撫教し、惟だ敵を是れ求む。今大駕は蒙塵し、人は命を效すを思い、而して虜は敢えて自ら送り、衆心は忿憤とす。《兵法》（孫子）に曰く、『歸師は遏むる勿かれ。』又た曰く『之を死地に置き而して後に生きる。』今我は皆に之を得たり、何ぞ克たざるを患えん！若し其の捨て去れば、賊は必ず人に乗じ、或は餘變を生ぜん。」

寶は乃ち之に従う。**會**は陳を整えて魏兵と戦ひ、**農、隆**等は南來の騎を將いて之を冲（続は衝）き、魏兵は大敗し、追いて百餘里奔り、斬首は數千級。**隆**も又た獨り數十里を追いて而して還り、故の吏の留台（隆はもと留台を録す、107 卷孝武帝太元 14 年にあり）治書の**陽璆**に謂つて曰く、

「中山の城中は兵を積んで數萬なりしが、吾が意を展べるを得ず、今日之捷ちは、人をして遺恨せ令む。」因りて慷慨流涕す。

【慕容會叛乱鎮圧に高雲活躍】

▲ 「慕容會は嗣となれずを思い、乱を謀る」 **會**は既に魏兵を敗り、矜很（誇り捻れる）はますます滋々甚し。**隆**は屢々之を訓責し、**會**は益々忿恚す。**會**は**農、隆**が皆な嘗て龍城に鎮して、屬は尊く位は重く、名望は素より己の右に出るを以て、龍城に至れば、復た權政は己に在らずを恐れ、已に終に嗣と為る之望み無きを知り（慕容垂の命に違ひて**寶**が太子を決めたと知る）、乃ち亂を作らんと謀る。

▲ 「慕容會の衆と**寶**の側近の離間」 幽、平之兵は皆な**會**の恩を懷しみ、二王に屬するを楽しまず、**寶**に請いて曰く、

「清河王の勇略は世に高く、臣等は之と與に生死を同じくするを誓ひ、願はくは陛下は皇太子と、諸王を薊宮に留め、臣等は王に従ひて南に京師之圍みを解き、還りて大駕を迎えん。」

寶の左右は皆な**會**を惡み、**寶**に言つて曰く、

「清河王は太子と為るを得ず、神色は甚だ平らかならず。且つ其の才武は人に過ぎ、善く人心を収める。陛下が若し衆の請うに従えば、臣は圍みを解く之後は、必ず衛輒之事（衛の靈公の世子蒯聵は出奔し、靈公は子の輒を立つ。靈公卒し輒立、蒯聵入るも輒は拒絶）有るを恐れる。」

寶は乃ち衆に謂つて曰く、

「道通（**會**の字）は年少く、才は二王に及ばず、豈に專征之任に當たる可けんや！且つ朕は方に自ら六師を統べ、**會**によ杖りて以て羽翼と為すは、何の左右を離れる可けん也！」衆は悦ばず而して退く。

▲ 「會の処遇をめぐる農、隆との相違」 左右は**寶**に**會**を殺すを勧め、侍御史の**仇尼歸**は之を聞き、**會**に告げて曰く、

「大王の恃む所の者は父、父は已に圖を異にす。杖る所の者は兵、兵は已に手を去る。何の所に於いて自ら容れんと欲する乎？二王を誅し、太子を廢し、大王は自ら東宮に處り、將相之任を兼ね、以て社稷を匡復するに如かず、此れ上策也。」

會は猶豫して、未だ許さず。

寶は農、隆に謂って曰く、

「道通の志趣を觀るに、必ず反は疑い無く、宜しく早く之を除くべし。」

農、隆は曰く、

「今寇敵は内に侮り、中土は紛紜して、社稷之危うきこと、累卵の如く有り。會は舊都を鎮撫し、遠く國難に赴き、其の威名之重きは、以て四鄰を震動するに足る。逆狀は未だ彰われず而して遽に之を殺せば、豈に父子の恩を傷つくに徒り、亦た恐らくは大いに威望を損ぜんや。」

寶は曰く、

「會の逆志は已に成り、卿等の慈恕は、早く殺すに忍びず、恐らく一旦變を為せば、必ず先ず諸父を害し、然る後に吾に及び、(7-016p)時に至りて自ら負けるを悔ゆる勿かれ也！」

會は之を聞き、益々懼れる。

▲ 「慕容會は農、隆を襲わしむ」 夏，四月，癸酉（6日），寶は廣都（熱河特別区域熱河道凌源県、現・朝陽市凌源市）の黃榆谷に宿す。會は其の黨の仇尼歸、吳提の染干を遣わして壯士二十餘人を帥いて分道して農、隆を襲わしめ、隆を帳下に殺す。農は重創を被り、仇尼歸を執え、逃げて山中に入る。會は仇尼歸の執らえ被れ、事は終に顯に發するを以て、乃ち夜寶に詣りて曰く、

「農、隆は逆を謀り、臣は已に之を除けり。」

寶は會を討たんと欲し、^{いつわり}陽に好言を為し以て之を安んじて曰く、

「吾は固より二王を疑うこと久しく矣、之を除くは甚だ善し。」

▲ 「慕容會は宝を欺くも、討たれんとす」 甲戌（7日），旦，會は仗（兵仗）を立てて備えを嚴にして、乃ち道を引く。會は隆の喪（屍）を棄てんと欲し、餘崇は涕泣して固く請い、乃ち載せて軍に隨うを聽し、農は出で、自ら歸り、寶は之を呵して曰く、

「何を以て自ら負く邪！」

命じて之を執らえしむ。十餘里を行きて、寶は顧みて群臣を召して食し、且つ農の罪を議す。會は坐に就き、寶は衛軍將軍の慕輿騰に目くばせして會を斬らせめ、其の首を傷つけるも、殺す能わず。會は走りて其の軍に赴き、兵を勒して寶を攻む。寶は數百騎を帥いて二百里を馳せ、晡の時、龍城に至る。會は騎を遣わして追いて石城（直隸省津海道灤県、現・唐山市灤州市）に至り、及ばず。

▲ 「會は龍城の宝を攻め、敗れて中山に奔る」 乙亥（8日），會は仇尼歸を遣わして龍城を攻める。寶は夜兵を遣わして襲撃し、之を破る。會は遣使して左右の佞臣を誅せんを請い、並びに太子と為るを求め。寶は許さず。會は盡く乗輿器服を収め、後宮を以て分けて將帥に給し、百官を署置し、自ら皇太子を稱し、尚書事を録し、兵を引いて龍城に向かい、慕輿騰を討つを以て名と為す。丙子（9日），兵を城下に頓す。寶は西門に臨み、會は乘馬して遙かに寶と語り、寶は之を責讓す。會は軍士に命じて寶に向かい大いに噪がしめ以て威を耀かし、城中の將士は皆な憤怒し、暮れるに向いて出でて戦い、大いに之を破り、會の兵は太半死傷して、走りて營に還る。侍御郎の高雲（後の北燕の初代皇帝）は夜敢死（決死）士百餘人を帥いて會の軍を襲い、會の衆は皆な潰ゆ。會は十餘騎を將いて中山に奔り、開封公の詳は之を殺す。寶は會の母及び其の三子を殺す。

▲ 「慕容宝の論功行賞」 丁丑（10日），寶は大赦し、凡そ會と同じく謀る者は、皆な罪を除き、舊職に復す。論功行賞して、將軍に拜し、侯に封じる者は數百人。遼西王の農は骨破れて腦を見られ、寶は手ずから自ら（^つ續は手のみ）創を裹み、僅に而して濟うを獲る。農を以て左僕射と為し、尋いで司空に拜し、尚書令を領せしむ。餘崇は出でて自ら歸し、寶は其の忠を嘉とし、中堅將軍に拜し、宿衛を典ぜしむ。高陽

王の隆に司徒を贈り、諡して康と曰う。

▲[宝は高雲を養子とする] 寶は高雲を以て建威將軍と為し、夕陽公に封じ、養いて以て子と為す。雲は、高句麗之支屬也、燕王の皝は高句麗を破り（97 卷成帝皆康八年にあり）、青山（遼西徒河県、奉天省遼瀋道錦県の西北、現・錦州市義県）に徙し、是に由りて世々燕臣と為る。雲は沉厚寡言にして、時の人知る莫し、惟だ中衛將軍の長樂の馮跋（北燕実質創設者）は其の志度（志と度量）を奇として、之と友と為る。跋の父の和は、西燕王の永に事え、（7-017p）將軍と為り、永敗れて、和龍に徙る。

【政治対立を利用する桓玄は、王國寶を追い込む】

■[王國寶・會稽王の道子と王恭、殷仲堪の対立] 僕射の王國寶、建威將軍の王緒は會稽王の道子に依附し、賄を納め奢を窮め、紀極（限度）を知らず。王恭、殷仲堪を惡み、道子に其の兵權を裁損せんと勸める。中外は恟恟として安からず。恭等は各々甲を繕い兵を勒し、表して北伐を請う。道子は之を疑い、詔して盛夏にて農を妨げるを以て、悉く嚴を解か使む。

■[桓玄の企み] 恭は遣使して仲堪と國寶等を討たんと謀る。桓玄は仕えて志を得ず（孝武帝太元 17 年にあり）を以て、仲堪の兵勢を假りて以て亂を作らんと欲し、乃ち仲堪に説いて曰く、

「國寶は君諸人と素より已に對（敵）と為り（事は 107 卷孝武帝太元 15 年に始まる）、唯だ相い斃す之速かならざるを患う耳。今既に大權を執り、王緒と相い表裡し、其の回（続は廻）易する所は、志の如くならざるは無し。孝伯（王恭の字、孝武帝の皇后の兄弟）は元舅之地に居て、必ず未だ敢えて之を害さず。君は先帝の拔（拔擢）く所と為り、超えて方任（方伯の任）に居り、人情は皆な君を以て思致有り（太元 15 年の見える）と雖も、方伯の才に非ずと為す。彼が若し詔を發して君を征（続は徴）して中書令と為し、殷覲（いんき）を用いて荊州（南蠻校尉は資次、荊州と為る可、故に言う）と為せば、君は何んぞ以て之を處せん？」

仲堪は曰く、

「之を憂うるに久しき矣、計は將に安くに出でんや？」

玄は曰く、

「孝伯は惡を疾むこと深く至り、君は宜しく潜かに之と約し、晉陽之甲（春秋公羊傳に趙鞅は晉陽之甲を起こして君側の惡を除く）を興して以て君側之惡を除くべし、東西齊しく（東は京口、西は荊州）舉げれば、玄は不肖なりと雖も、願はくは荊、楚の豪傑を帥いて、戈を荷ないて先驅せん、此れ桓（齊の桓公）、文（晉の文公）之勳也。」

仲堪は心に之を然りとなし、乃ち外は雍州荊史の郗恢（ちかい）に結び、内に從兄の南蠻校尉の覲、南郡の相の陳留の江續と與に之を謀る。覲は曰く、

「人臣は各々職分を守るべし、朝廷の是非は、豈に籓屏之制する所なる也！晉陽之事は、敢えて預り聞かず。」

仲堪は固く之を邀め（もとめ）、覲は怒りて曰く、

「吾は進みて敢えて同じならず、退きて敢えて異ならず。」

續も亦た其の可からざるを極言す。覲は續が禍いに及ばんことを恐れ、坐に於いて之と和解す。續は曰く、

「大丈夫は何ぞ死を以て相い脅かすに至らん邪？江仲元（續の字）は行年六十、但だ未だ死所を獲ざる耳！」

仲堪は其の堅正を憚りて、楊佺期を以て之に代わらしむ。朝廷は之を聞き、續を征（続は徴）して御史中丞と為す。覲は遂に疾（続は散、散薬の毒、晋人は多く寒食散を使う）發すと稱し、位を辭す。仲堪は往きて之を省し、覲に謂って曰く、

「兄の病は殊に憂える可きと為る。」

覬は曰く、

「我が病は身死するに過ぎず、汝の病は乃ち當に門を滅すべし。宜しく深く自愛すべし、我を以て念と為す勿かれ！」

郗恢も亦た肯えて従わず。仲堪は疑いて未だ決せず、王恭の使いが至るに會して、仲堪は之を許し、恭は大いに喜ぶ。甲戌（7日）、恭は國寶の罪狀を上表して、兵を擧げて之を討つ。

■ 〔王國寶に死を賜る〕 初め、孝武帝は王珣に委任し、帝の暴^{にわか}な崩に及びて、顧命を受けるに及ばず、珣は一旦勢いを失い、循默（従いて一言も無し）而して已む。丁丑（10日）、王恭の表至り(7-018p)、内外戒嚴（続は外戒嚴嚴×）し、道子は珣に問いて曰く、

「二藩は逆を作す、卿は之を知る乎？」

珣は曰く、

「朝政の得失は、珣は之に預からず、王、殷は難^なを作す、何の由か知る可し！」

王國寶は惶懼し、為す所を知らず、數百人を遣わして竹裡（江蘇省金陵道句容県、現・鎮江市句容市）に戍せしめ、夜風雨に遇い、各々散じて歸る。王緒は國寶を説く、

「相王之命を矯して王珣、車胤を召き之を殺し、以て時望を除き、因りて君相を挾んで兵を發し以て二藩を討たん。」

國寶は之を許す。珣、胤は至り、國寶は敢えて害せず、更に計を珣に問う。珣は曰く、

「王、殷と卿とは素より深怨無く、競う所は勢利之間に過ぎざる耳。」

國寶は曰く、

「將に我を曹爽（蔣濟は曹爽に説きて權を釋かしめ、司馬懿は終にこれを族す、75 卷魏邵陵厲公嘉平元年にあり）とする乎？」

珣は曰く、

「是れは何の言ぞ歟！卿は寧^{なん}ぞ爽之罪有らんや、王孝伯は豈に宣帝之儔^{ともがら}ならん邪？」

又た計を胤に問う、胤は曰く、

「昔桓公は壽陽を圍み、時に彌^{わた}りて乃ち克つ（102 卷海西公太和五年、103 卷簡文帝咸安元年にあり）。今朝廷は軍を遣わせば、恭は必ず城守せん。若し京口未だ拔かざれば而して上流より奄至すれば、君は將に何を以て之を待つや？」

國寶は尤もと懼れ、遂に上疏して職を解き、闕に詣りて罪を待つ。既に而して之を悔い、詐りて詔と稱して其の本官に復す。道子は暗儒にして、姑息を求めんと欲し、乃ち罪を國寶に委ね、驃騎咨議參軍の譙の王尚之を遣わして國寶を収めて廷尉に付ける。尚之は、恬之子也。甲申（17日）、國寶に死を賜わり、緒を市にて斬り、遣使して恭に詣らしめ、深く愆失^{げんしつ}（過失）を謝す。恭は乃ち兵を罷めて京口に還る。國寶の兄の侍中の愷、驃騎司馬の愉は並びて解職を請う。道子は愷、愉が國寶と異母にして、又た素より協せざるを以て、皆な釋して問わず。戊子（21日）、大赦す。

■ 〔殷仲堪の挙兵をなだめる〕 殷仲堪は王恭を許すと雖も、猶豫して敢えて下さず。國寶等の死を聞き、乃ち始めて抗表（上表）して兵を擧げ、楊佺期を遣わして巴陵に屯せしむ。道子は書を以て之を止め、仲堪は乃ち還る。

■ 〔會稽の世子元顯は俊才〕 會稽の世子元顯は、年十六にして、雋才（俊才）有り、侍中と為り、道子を説いて以て、

「王、殷は終に必ず患と為らん、請う潜かに之が為に備えん。」

道子は乃ち元顯を拜して征虜將軍とし、其の衛府及び徐州の文武を以て悉く之に配す。

【北涼の沮渠蒙遜、慕容詳は一時自立】

● 【拓跋珪は計略で慕容詳を釣る】 魏王の珪は軍食の給せざるを以て、東平公の儀に命じて鄴を去り、徙りて巨鹿に屯し、租を楊城に積ましむる。慕容詳は歩卒六千人を出して、間を伺いて魏の諸屯を襲う。珪は撃ちて之を破り、斬首は五千、生け擒りは七百人、皆な之を縦つ。(捕虜にすれば食がいり、殺せばまた降らず)
北涼 【沮渠蒙遜の自立宣言】 初め、張掖の盧水胡(分かれて安定・張掖に居る)の沮渠羅仇は、匈奴の沮渠王之後也、世々部帥と為る。涼王の光は羅仇を以て尚書と為し、光に従いて西秦を伐たしむ。呂延の敗死に及び、羅仇の弟の三河(金城河・賜支河・湟河、漢の張掖と金城の間、甘肅省西寧道西寧県の東南の白土、現・青海省海東市 互助トゥ族自治県)太守の麴粥は羅仇に謂って曰く、

「主上は荒耄にして讒(言)を信ず (7-019p)、今軍は敗れ將は死し、正に其の智勇を猜忌する之時也。吾が兄弟は必ず容れ見れず、其の死之名無からんと與に(続は無し)、兵を勒して西平(河西の張氏は西平郡を置く。甘肅省西寧道舊西寧府の地。西都、現・西寧市城中区)に向かうに如かず。苕藿(甘肅省甘涼道永昌県、現・金昌市永昌県)に出で、臂を奮るって一呼すれば、涼州は定むに足らざる也(簡単という意味)。」

羅仇は曰く、

「誠に汝の言の如し。然るに吾が家は世々忠孝を以て西土に著しく、寧ろ人をして我に負か使むとも、我は人に負くを忍びざる也。」

光は果たして讒を聴き、敗軍之罪を以て羅仇及び麴粥を殺す。羅仇の弟の子の蒙遜は、雄は傑して策略有り、書史を涉獵し、羅仇、麴粥之喪を以て葬に歸る。諸部は其の族姻多し、會葬者は凡そ萬餘人。蒙遜は哭して衆に謂って曰く、

「呂王は昏荒無道にして、多く不辜(無罪)を殺す。吾之上世(匈奴の先祖、世々盧水に居り酋豪なり)は、河西を虎視し、今諸部と二父(羅仇・麴粥)之恥を雪ぎ、上世之業を復すると欲するは、何如ぞ？」
衆は咸な萬歲を稱す。遂に結盟して兵を起し、涼の臨松郡(甘肅省甘涼道張掖県、現・張掖市肅南ユグル族自治県)を攻め、之を抜き、金山(甘肅省甘涼道山丹県、現・張掖市山丹県)に屯據す。

■ 【王恭は王廙を破る】 司徒左長史の王廙は、導之孫也、母の喪を以て吳に居る。王恭之王國寶を討つ也、廙を版(白板を以て官を授ける、朝廷の命令ではない)じて吳國の内史を行わしめ、兵を東方に起こさ使む。廙は前の吳國內史の虞嘯父等をして吳興、義興に入り兵衆を召募せ使め、赴く者は萬を計る。未だ幾くならず、國寶は死し、恭は兵、符を罷め廙は職を去り、喪服に反る(喪に戻る)。廙は兵を起こす之際を以て、己と異なる者を誅すること頗る多く、勢い止どめることを得ず、遂に大いに怒り、恭の命を承けず、其の子の泰をして兵を將いて恭を伐たしめ、會稽王の道子に箋し、恭の罪惡を稱す。道子は其の箋を以て恭に送り、五月、恭は司馬の劉牢之を遣わして五千人を帥いて泰を撃たしめ、之を斬る。又た廙と曲阿に戦い、衆は潰え、廙は單騎にして走り、在る所を知らず。虞嘯の父を収め廷尉に下し、其の祖潭が功(虞嘯は蘇峻を討つ功あり)有るを以て、免じて庶人と為す。

▲ 【慕容詳は中山で即位】 燕の庫辱官驥(慕容寶が派遣)は中山に入り、開封公の詳と相い攻める。詳は驥を殺し、盡く庫辱官氏を滅す。又た中山尹の苻謨を殺し、其の族を夷げる。中山の城は定主無く、民は魏兵の之に乗るを恐れ、男女は結盟し、人々は自ら戦いを為す。甲辰(7日)、魏王の珪は中山之圍みを罷

め、穀に河間に就き、諸郡の義租を督す。甲寅（17日）、東平公の儀を以て驃騎大將軍、都督中外諸軍事、兗、豫、雍、荊、徐、揚六州牧、左丞相と為し、衛王に封じる。慕容詳は自ら能く魏兵を卻^{しりぞ}（（続は却））け、威徳は已に振るうと謂い、乃ち皇帝に即位し、改元して建始とし、百官を置く。新平公の可足渾譚を以て車騎大將軍、尚書令と為し、拓跋觚（拓跋珪の弟、使者に来るを留める）を殺し以て衆心を固める。

▲（7-020p）鄴中の官屬は范陽王の徳に尊號を稱するを勧め、^{たまたま}會 龍城より來たる者有り、燕主の寶の猶ほ存するを知り、乃ち止む。

北涼「**蒙遜は段業を説いて、北涼の基礎を築く**」涼王の光は太原公の纂を遣わして兵を將いて沮渠蒙遜を忽谷（甘肅省甘涼道山丹県、現・張掖市山丹県）に撃ち、之を破る。蒙遜は逃げて山中に入る。蒙遜の從兄の男成は涼の將軍為り、蒙遜が兵を起こすと聞き、亦た衆數千を合わせて樂涇（甘肅省安肅道高臺県、現・張掖市高台県）に屯す。酒泉太守の璽澄は男成を討ち、兵は敗れ、澄は死す。男成は建康（現・甘肅省酒泉市東部）に進攻し、遣使して建康太守の段業を説いて曰く、

「呂氏の政は衰え、權臣は命を擅^{ほしいまま}にし、刑殺に常無く、人の容るる處無し。一州之地は、叛者は相い望み、瓦解之形は、昭然として目に在り、百姓は嗷然として依り附く所無し。府君は奈何して蓋世之才を以て、亡びに垂れる之國に於いて忠を立てんと欲するか！男成等は既に大義を唱え、府君を屈して鄙州を撫臨し、塗炭之餘をして、來蘇之惠（書經の仲虺之誥に、我が后を俟つ俟、后来たらば其れ蘇らん）を蒙^{よみがえ}ら^{こうむ}使めんと欲するが、何如？」

業は従わず。相持つこと二旬、外に救い至らず、郡人の高遠、史惠等は業に男成之請いに従うを勧める。業は素より涼の侍中の房晷、僕射の王詳と平らかならず、懼れて自ら安ぜず、乃ち之を許す。男成等は業を推して大都督、龍驤大將軍、涼州牧、建康公と為し、改元して神璽とす。男成を以て輔國將軍と為し、軍國之任を以て委ねる。蒙遜は衆を帥いて業に歸し、業は蒙遜を以て鎮西將軍と為す。光は太原公の纂に命じて兵を將いて業を討たしめるも、克たず。

西秦六月、西秦王の乾歸は河州（張駿・晋興・金城・武始・南安・永晋・大夏・武威・漢中を分けて河州とする、北河州は乞伏氏が置く。枹罕に治す）刺史の彭奚念を征（（続は徵））して鎮衛將軍（劉聰の置く官）と為す。鎮西將軍の屋引（（続、屋弘））破光を以て河州牧と為す。定州（張茂は武興・金城・西平・安故を分けて定州を置く）刺史の翟瑠を興晋（張氏が置く）太守と為し、枹罕（現・臨夏市）に鎮ぜしむ。

▲「**横暴な慕容詳を慕容麟が滅ぼし、尊号を称する**」秋，七月，慕容詳は可足渾譚を殺す。詳は酒を嗜み奢淫にして、士民を恤^{あわれま}えず、刑殺に度無く、誅する所の王公以下は五百餘人、群下は離心す。城中は饑窘すれども、詳は民の出でで魯（自生の稻）を采るを聽さず、死者は相枕し、城を舉げて皆な趙王の麟を迎えんと謀る。詳は輔國將軍の張驤を遣わして五千餘人を帥いて租を常山に督せしめ、麟は丁零より驤の軍に入り、潜かに中山を襲い、城門は閉じず、詳を執り、之を斬る。麟は遂に尊號を稱し、人の四出して魯を采るを聽す。人は既に飽き、魏と戦うを求める。麟は従わず、稍く復た窮餒^{きゆうたい}す。魏王の珪は魯口に軍し、長孫肥を遣わして騎七千を帥いて中山を襲わしめ、其の郛（城外の大廓）に入る。麟は進みて泝水（沙河、直隸省保定道）に至り、魏の敗る所と為り而して還る。

●「**魏王珪の軍は疫病で半分壊滅**」八月，丙寅（1日）朔，魏王の珪は軍を常山之九門（郡名、直隸省保定道藁城県、現・石家荘市正定県）に徙す。軍中は大きい疫となり、人畜は多く死し、將士は皆な歸るを思う。珪は疫を諸將に問う、對えて曰く、

「在る者は才^{わずか}に什に四、五のみ。」

珪は曰く、(7-021p)

「此れは固より天命なり、將に之を若何せんや？四海之民は、皆な國を為す可きにて、吾の之を御する所以に在る耳、何ぞ民無きを患えんや！」

群臣は乃ち敢えて言わず。撫軍大將軍の略陽公の遵^{うれ}を遣わして中山を襲わしめ、其の郭に入りて而して還る。

▲燕は遼西王の農を以て都督中外諸軍事、大司馬と為し、尚書事を録せしむ。

【北涼の大乱】

北涼 **〔涼の郭磨と王詳の反乱〕** 涼の散騎常侍、太常の西平の郭磨^{かくとん}は、善く天文數術をなし、國人は信じて之を重しとす。熒惑の東井を守るに會して、磨は僕射の王詳に謂って曰く、

「涼之分野に、將に大兵有り。主上は老病にして、太子は闇弱、太原公は凶悍なり。一旦不諱あれば、禍亂は必ず起こらん。吾二人は久しく内要（宮中の要職）に居り、彼は常に切齒し、將に誅首を為さんとす矣。

田胡（胡の一種）王の乞基の部落は最も強く、二苑（涼州は姑藏に治し、二苑有り）之人は、其の舊衆は多し。吾は公と與に大事を挙げ、乞基を推して主と為さんと欲し、二苑之衆は、盡く我れの有也。城を得て之後、徐ろに更に之を議さん。」

詳は之に従う。磨は二苑之衆を以て洪範門を焼き、詳をして内應を為さ使めんとす。事は洩れ、詳は誅せ被れ、磨は遂に東苑に據りて以て叛す。民間は皆な言う、

「聖人が兵を起こせば、事は成らざる無し」

之に従う者は甚だ衆し。

北涼 **〔呂光は呂纂を討伐に行かせる〕** 涼王の光は太原公の纂を召して磨を討た使む。纂は將に還り、諸將は皆な曰く、

「段業は必ず軍の後を躡まん、宜しく師を潜めて夜發せん。」

纂は曰く、

「業は雄才無く、城に怵^{しか}（続は馮）りて自ら守らん。若し師を潜めて夜出（続、去×）でれば、適^{たちま}ち其の氣勢を張るに足らん耳。」

乃ち遣使して業に告げて曰く、

「郭磨は亂を作り、吾は今都（姑藏）に還らんとす。卿は能く決（決戦）する者ならば、早く出でて戦う可し。」

是に於いて引いて還る。業は敢えて出ず。

北涼 **〔纂の司馬の楊統は郭磨に就く〕** 纂の司馬の楊統は其の從兄の桓に謂って曰く、

「郭磨は事を挙げ、必ず虚しく發せざらん。吾は纂を殺し、兄を推して主と為し、西に呂弘を襲い、張掖に據り、諸郡に號令せんと欲す、此くは千載一時也。」

桓は怒りて曰く、

「吾は呂氏の臣と為り、安きときは其の祿を享けるに、危うきときは救う能わざるは、豈に復た其の難を増す可けん乎？呂氏が若し亡びれば、吾は弘演（春秋に衛の懿公が狄人と熒澤に戦い、狄人に殺され、弘演は肝を納めて之に殉じる）と為らん矣！」

統は番禾（県名、甘肅省甘涼道永昌県の東、現・永昌県の東）に至り、遂に叛して磨に歸す。弘は、纂之弟也。

北涼 **〔郭磨は呂光の孫八人を虐殺〕** 纂は西安太守の石元良と共に磨を撃ち、大いに之を破り、乃ち姑臧に入るを得る。磨は光の孫八人を東苑に得て、及ち敗るるに而して^{いか}沸り、悉く鋒上に投じ、枝分節解し、其の血を飲みて以て衆に盟し、衆は皆な目を掩う。

北涼 **〔郭磨は禿髮烏孤に救いを請う〕** 涼人の張捷、宋生等は戎、夏の三千人を招集し、休屠城（甘肅省甘涼道武威県、現・武威市涼州区）に反し、磨と共に涼後將軍の楊軌を推して盟主と為す。軌は、略陽の氏也。將軍の程肇は諫めて曰く、

「卿は龍頭を棄て而して蛇尾に従う、計に非ざる也。」

軌は従わず、自ら大將軍、涼州牧、西平公と稱す。

纂は磨の將の王斐を城西に於いて撃破し、磨の兵勢は漸く衰え、遣使して禿髮烏孤に救いを請う。九月、烏孤は其の弟の驃騎將軍の利鹿孤をして騎兵五千を帥いて之に赴か使む。（7-022p）

後秦 **〔秦主の興の哀毀は禮に過ぎ〕** 秦の太后の蛇（^{続は蛇}）氏は卒す。秦主の興の哀毀は禮に過ぎ、親ら庶政せず。群臣は漢、魏の故事に依り、即（^{続は既}）に葬りて吉（^{吉服}）に即かんと請う。尚書郎の李嵩は上疏して曰く、

「孝をもって天下を治めるは、先王之高事也。宜しく聖性に遵いて以て道訓を光とし、既に葬る之後、素服して朝に臨むべし。」

尹緯は駁して曰く、

「嵩の常を矯すること禮を越え、有司に付して罪を論ずるを請う。」

興は曰く、

「嵩は忠臣にして孝子なり、何の罪有る乎！其れ一に嵩の議の如くすべし。」

鮮卑の薛勃（元々貳城に據し、魏に攻められて秦に降る）は秦に叛し、秦主の興は自ら將いて之を討つ。勃は敗れ、沒奔干に奔り、沒奔干は執りて之を送る。

後秦 秦の^{げん}苻氏の男の姚買得は秦主の興を弑せんと謀り、克たず而して死す。

後秦 **〔後秦は洛陽攻撃〕** 秦主の興は湖城（湖城陝城の二戎を置くは 106 卷太元 11 年にあり）に入寇し、弘農太守の陶仲山、華山（晋が置いた郡）太守の董邁は皆な之に降る。遂に陝城（現・三門峽市陝州区）に至り、進みて上洛（郡名、晋武泰始二年、京兆南部に置く、現・商洛市商州区）を寇し、之を抜く。姚崇を遣わして洛陽を寇し、河南太守の夏侯宗之は固く金墉を守り、崇は之を攻めて克たず、乃ち流民二萬餘戸を徙して而して還る。

後秦 武都の氏の屠飛、啖鐵等は方山（甘肅省渭河道成県、現・隴南市成県）に據りて以て秦に叛し、興は姚紹等を遣わして之を討ち、飛、鐵を斬る。

後秦 **〔後秦主興は政事に専念〕** 興は政事に勤め、善言を延納し、京兆の杜瑾等は皆な事を論ずるを以て顯拔を得、天水の姜龕等は儒學を以て尊禮せ^{らん}見れ、給事黃門侍郎の古成詵等は文章を以て機密に參ず。詵は剛介にして雅正、風教を以て己が任を為す。京兆の韋高は阮籍之人と為りを慕い、母の喪に居り、琴を彈き酒を飲（^{続、餘}）む・詵は之を聞きて而して泣き、劍を持ちて高を求め、之を殺さんと欲し、高は懼れて而して逃れ匿れる。

【北魏は遂に中山を落す】

▲ **〔魏は慕容麟を攻める〕** 中山は饑えて甚しく、慕容麟は二萬餘人を帥いて出でて新市（直隸省保定道樂^{らん}樂城、石家莊市樂城區）に據る。甲子（29日）晦、魏王の珪は進軍して之を攻める。太史令の晁崇は曰く、

「不吉なり。昔紂は甲子を以て亡び、之を疾日と謂いて、兵家は之を忌む。」

珪は曰く、

「紂は甲子を以て亡びる、周武は甲子を以て興こらざる乎？」

崇は以て對える無し。冬、十月、丙寅（2日）、麟は退きて泝水を阻む。甲戌（10日）、珪は麟と義台に戦い、大いに之を破り、斬首は九千餘級。麟は數十騎と馳せて妻子を取りて西山に入り、遂に鄴に奔る。

● 「魏主は中山に勝ち、弟の觚の仇を討つ」 甲申（20日）、魏は中山に克ち、燕の公卿、尚書、將吏、士卒の降る者は二萬餘人。張驤、李沈等は先に嘗て魏に降り、覆た亡げ去る。珪は入城し、皆な之を赦す。燕の璽綬、圖書、府庫珍寶を得ること萬數を以てし、群臣將士に班賞して差有り。弟の觚に追諡して秦愍王と為す。慕容詳の塚を發き、其の屍を斬る。觚を殺す者の高霸、程同を収め、皆な五族を夷げ、大刀を以て之を剄む。丁亥（23日）、三萬騎を遣わして衛王の儀に就かしめ、將に鄴を攻めんとす。(7-023p)

後秦 **西秦** 秦の長水校尉の姚珍は西秦に奔り、西秦王の乾歸は女を以て之の妻とす。

南涼 河南の鮮卑の吐秣等十二部の大人は、皆な秃髮烏孤に附く。

▲ 「慕容宝は中原復帰を目指して南下」 燕人の中山より龍城に至る者有り、言う、

「拓跋珪は衰弱し、司徒の德は鄴城を完守す。」

德の表至るに會して、燕主の寶に南に還るを勧め、寶は是に於いて大いに士馬を簡び、將に復た中原を取らんとす。鴻臚の魯遂を遣わして德を冊拜して丞相、冀州牧と為し、南夏公侯牧守を皆な製を承けて封拜するを聽す。十一月、癸丑（19日）、燕は大赦す。十二月、兵を調べて悉く集め、戒嚴して頓に在り、將軍の啟命を遣わして南に形勢を視さしむ。

▲ 「慕容麟は鄴に至り、滑台に移るを德に提案」 乙亥（12日）、慕容麟は鄴に至り、復た趙王を稱し、范陽王の德を説いて曰く、

「魏は既に中山に克ち、將に勝ちに乗りて鄴を攻めんとす、鄴中は蓄積有ると雖も、然るに城は大にして固め難く、且つ人心は恒懼し、守る可からざる也。南の滑台に趣くに如かず、河を阻として以て魏を待ち、釁を伺いて而して動けば、河北は庶くは復す可からん也。」

時に魯陽王の和は滑台に鎮し、和は、垂之弟の子也、亦た遣使して德を迎え、德は之を許す。

令和2年7月12日 完訳開始 8914文字

令和2年11月7日 完訳終了 17963文字 現代地名・年表追加

令和3年12月23日 書下し終了 18873文字